

更生保護施設の展望

千葉県保護観察所 処遇部門二 第二統括

統括保護観察官

濱近 羊子



平成二十年四月一日付で千葉県の更生保護の仲間入りをさせていただき、嬉しく思っております。更生保護施設の担当は、今年三月まで勤務していた福島に次いで二回目です。

更生保護施設は、いま過渡期を迎えようとしています。昨年度立ち上がった有識者会議である「更生保護施設検討会」では、更生保護施設の果たすべき役割について、あらためて議論がなされています。更生保護施設は、宿泊と食事を提供する施設から、更生保護事業法施行を機に処遇が位置づけられ、いまや、行き場がない高齢者や障害者の受け皿となることも求められるということでしょうか。

しかし、「言うは易く行うは難し」のとおり、高齢者や障害者を受け入れるには、バリアフリーなどのハード面だけでなく、職員体制や委託費等ソフト面でも大変革が求められます。

しかし、国設・国営の沼田町就業支援センターや自立更生促進センターの開業が実現することになり、更生保護施設の役割自体が議論されることになることはやむを得ないものと思いません。

私がいた福島では、地域の貧困な無職対象者の状況打開を図って、更生保護施設に入所させたことがありました。その者は、協力雇用主の許で稼働し免許を取得して地域に戻っていきました。

車がないと生活できない福島ならではのエピソードですが、今後は、行き場がない対象者の住居確保に留まらず、地域処遇の助っ人的な役割も期待されるものと思っております。

思うこと

千葉県保護観察所 処遇部門二

保護観察官(婦性会担当官)

田中 浩



「蟹工船」という戦前の小説が版を重ねて読まれている。逃げ場のない苛酷な労働環境の中で、何重にも搾取される絶望感から労働者達の暴動が発生するという物語だが、現代の派遣労働者が共感を持って読んでいると言われる。解雇されれば、即、住居不定無職に追い込まれる派遣労働者の不安感や焦燥感、這い上がるにも道筋が見つかからない絶望感が小説の世界と二重写しになる。

秋葉原の大量無差別殺人の犯人もそうした派遣労働者だった。インターネットの仮想空間の

みが、唯一「世界とのつながり」を彼に感じさせてくれたが、そのネットからも見放されたとき、彼は爆発した。

社会や家族、どこにも自分の居場所が無いと思うとき、人は生きる意味を失うのだろう。更生保護施設で保護を受ける者も、居場所を喪失した人達である。これらの人々を叱咤激励し、再び居場所を見つけさせるのが、私達の仕事なのかもしれない。

職員として

千葉県婦性会

補導員

小堀 和人



何もわからない更生保護の世界に飛び込んで、今年で五年目になりました。

はじめの頃、対象者の接し方で首をかしげたくなることや、とまどいの連続でした。

五年目を迎えた今でもとまどいがありますが、あの頃に比べると少なくなってきたかと思えます。

更生保護施設での被保護者との接触が、毎日勉強です。継続は“力”になると思っています。

